

(1)評価基準に沿った評価	2人	4人	0人	0人	0人	4.3
(2)記述評価						
・2歳児以下の児を含めた小児の肺音の解析方法を確立し、新しい肺音のパラメーターを見出した。本年は喘息発作時の呼吸音の解析、種々のパラメーターと症状の関連についても結果を得た。喘息予知の面のみならず各種の疾患や児を取り巻く環境との関連についても調査を行った。 ・乳児期でぜん鳴を呈さない時期に、肺音解析でぜん息の診断が出来るというのは、従来の考えでは思いつかない画期的な研究である。測定時の外部ノイズ対策や測定技術等を考えると、汎用に至るまでには、まだ解決しなければ問題もあるが、実用化にむけて研究の発展を期待する。 ・乳幼児における肺音分析の標準化に略々成功したと評価する。 ・前方視的調査の推進を図っており、今後の成果を期待したい。また種々の呼吸器の研究にも応用が望まれる。 ・特に肺-気管支樹の成熟が完成するとされる5才の前と後での解析は意義深いと思われる。 ・乳幼児の肺音健診を侵襲の少ない方法で確立できる可能性を示しており、評価できる。最終年度の成果を期待する。 ・肺音図の歴史は古いが、これまで臨床の場で普及しなかったのは技術的な問題その他様々な理由があったものと考えられる。最近では器械そのものの性能やコンピューターによる解析も大変進歩している。ここで呼吸器疾患の診断に再度肺音図を取り上げ、その実用化を図ろうとする本研究は臨床的にも社会的にも大変有意義なテーマである。もし、一般の臨床医が扱いやすいようなソフトを作ることができれば広く普及するであろう。技術的に解決すべき問題はまだ沢山残っているかも知れないが、辛抱強く研究を重ねて、是非実用化の目処をつけて欲しい。						

・心音の解析により喘息のハイリスク群を早期に発見出来るとか、乳幼児の喘息の診断が可能であるなどの事が明瞭になれば、この手技を簡便化し、実用化し、一般に普及をはかるべく努力されることを望む。

・肺音の発生には肺の解剖学的構築が深く関与する。従って肺の発育を非侵襲的に定量性を以って継続評価できる可能性があると考えられる。生下児(未発達)を継続して観察し、肺の発育と気管支喘息発症のリスクとの関連性を解明する世界的にみてもオリジナルな研究への展開も検討されたい。

・この研究関連の英語論文を1報出しており、今後も続けていきたい。